

わたしの聖戦

◎◎女性が働くことについて◎◎32

医学博士・医学ジャーナリスト

植田美津江

本を選ぶは一生の仕事

日々おびただしい数の書籍が本屋に並ぶ。書店に行くとき、あまりの量と種類にめまいがしそう。

ちよつと大きな店になると、もう歩きまわるだけで疲れてしまう。しかし私は本が大好き、活字中毒を自称していることもあり、本屋には何時間いても飽きないタチである。

だからこそ思う。いつたいこれだけの本のなかで、読んでよかったと思えるものはどれくらいあるのだろうか。

小さな頃読んだものは、なぜか印象深い。大人になっても何か心が強く刻まれ、時に反芻(すう)し時に人生の師となる。

その頃は、「名作」といわれるものを周囲に薦められて読むことが多かった。長く読み継がれているものはそれだけの価値があるのか、あまり期待を外れることもなくしつ

くり自分のなかに入ってきた。反面、大人になればなるほど気に入った本との出会いは少なくなる。昔と違って、これと思

う本を手取る行為は、自分なりの情報に基づいた結果である。広告や書評を読んだ、賞を取った、書籍の装丁に魅かれた、

映画化された、などなど、このことがたくさんのかから選び手に取るきっかけとなる。そのなかで、

いわゆる「はずれ」が多いのも確かだ。読む量は増えることはあっても減っているわけではない。それでも読んだ後にかつかりさせられるもの、ほ

ものはいただけない。「○万人が泣いた」とか「感動をあなたに」といった押し付けがましいキャッチフレーズは特に要注意だ。ここは映画のコピーにも通じるところ大である。



次に、大きな賞を取ったものも半々く

らしいの確率で駄作に近い。受賞作家のほとんどをその

後見かけなくなるのも頷ける。何故これが賞を……? と疑問に思

う気持ちは、美人コンテス

トの際の優勝者を見たとき、ほとんどの人が、何でこの人が……? とい

ぶかる思いと似ている。では、どうしたら極上の本に出会えるのか。かたっぱしから読みまくる元気があればいいが、そうでない場合にはやは

り古典的な名作を読んでみることを薦めたい。本物は時代の古さを感じさせない。もちろん「名作」と呼ぶのも一種の広告ではあるが、そういった本のなかには、当時はよくわからなかったのに大人になつて改めてページを

繰ると、実に面白く思えるときがある。何故あのかと不思議な感覚にと

らわれるものだが、何のことはない、自分がそれだけ成長し変化を遂げているのである。その確かさを本から味わえるのもまた格別な喜びに違いない。

年間の出版数なんと8億冊の現代にあつて、良質な本を選ぶのもひとつの技術。だからこそ、本好きも書店めぐりもやめられない。

イラスト・三浦義雄